一つの仕事に打ち込んだ男女伝

発奮伝

出久根達郎（作家）

第12回

川路さと

（1804年～1884年）

テレビでおなじみの江戸町奉行・遠山の金さんこと遠山金四郎景元は実在の人物だが、実際に背中に桜吹雪の彫物を入れていた。

同時代にこちらは奈良奉行であった川路聖謨は、彫物こそ入れなかったが、桜吹雪に縁がある。しかも金さんが「いれずみ判官」と親しまれていたと同様、川路の聖さんは「おなら奉行」の異名で人気があった。お白洲（法廷）で遠慮なくぶっ放すからである。二人とも官名は同じ左衛門尉である。

聖さんが養父母、妻子を連れて江戸から奈良に赴任したのは、現在の暦で四月十四日だった。奉行所（奈良女子大学の所にあった）に到着した時、役人たちから満開の八重桜の枝を贈られた。聖さんは感激して歌を詠んだ。

「八重ざくら手折も惜しし九重に匂いし花のなごりと思えば」

川路夫妻は桜が大好きであった。奉行所の庭には桜の大木があったが、古木のせいか花をつけず葉ばかりである。川路はがっかりした。「いにしえは八重と聞きしが衰えて花も名のみの奈良の古さよ」

町には桜が少ない。花で埋もれた都を想像していた川路は、いにしえの花の都を再現しようと考えた。妻の希望もあったに違いない。

町衆に諮って寄付を募り、まず興福寺と東大寺境内に桜と楓数千株を植えた。春は花見、秋は紅葉狩にともくろんだのである。植樹は

かわじ・さと　文化元年（1804年）- 明治17年（1884年）　川路聖謨と同様、読み書きが好きだった。詩文もよくし、夫婦で歌を詠む様は、養徳社刊『桜奉行』にも見える。

佐保川沿い他、方々に広げた。やがて「花の都」の評判は全国に及んだ。観光客が押し寄せた。

川路は悪徳客引きとやくざを一掃した。バクチを禁止し、治安維持に努めた。墨や武具製作など地場産業発展に力を尽した。荒れている山陵に心を痛め、幕府に陳情した。学問と武術を奨励し、貧しい者の救済に骨を折った。犯罪取締りは厳格な一方、罪人の拷問は廃止した。

ちなみに町奉行は、知事と裁判長と警察署長、消防庁長官等を兼ねた民政官である。

川路聖謨は足掛け六年奈良奉行を在任した。

我悪しき

こののち大坂町奉行から勘定奉行に栄転し、ロシア使節プチャーチンとの日露交渉に臨み、日露和親条約を結ぶ。川路の出世はむろん本人の資質や努力のたまものだが、妻の内助の功を落とせない。

夫人は名をさとといった（佐登と書く）。川路の四人目の妻である。最初の妻は結婚生活二年で病没、二人目は一男二女を設けたが、川路が昇進するにつれわがままになり、話し合って離婚、三人目は性格不一致で別れる。

さとは幕府大工頭（だいくがしら）の娘で三十五歳、川路より三歳下で、初婚であった。十五歳で紀州徳川家の江戸屋敷に奉公し、姫に仕えた。八年

後、姫が亡くなり御殿勤めをやめた。将軍の息女が広島藩に嫁に行くことになり、紀州徳川家の口添えで侍女に加えられ、広島藩の江戸藩邸に上がった。姫に信頼され、若年寄役になった。そんな折、川路との縁談がもたらされた。川路は勘定吟味役で、火事で焼けた西丸（にしのまる）再建のための用材調達に木曽へ出張するところだった。あわただしく見合いをし、婚礼を挙げ、三日後に二十人の家来を連れ木曽山中に旅立った。さとは留守を守る。

川路の老母は病床にあり、下の世話はさとの役だった。老母の他に養父母がおり、先妻の子が四人いた。更に家来や雇人たちの面倒を見なければならない。さとは病身で、川路がケロケロと呼ぶ頭痛吐き気の持病があった。しかし、さとは泣きごと一つ言わず、てきぱきとこなした。まず老母が全幅の信頼を寄せ、養父母が尊敬し、子どもたちがなついた。家来たちは一人残らず心服した。女中たちは言わずもがなである。

これはのちの話だが、川路夫婦の好物にカクヤがあった。古漬けを塩出しして細かく刻み、おかかをふりかけてご飯の友にする。毎日食膳に出す。ところがここ数日姿を見ない。川路がけげんがり女中に訊（たず）ねると、新米の炊事婦が不器用なため包丁でケガしたという。さとが気の毒がり、カクヤを作らせぬように命じた。下々（しもじも）の者が若奥様を慕うのも無理はない。

二十年に及ぶ奥勤めで身に着けた人心掌握の骨法であろう。女だけの狭い世界では、嫉妬やいじめ、陰謀や脚のひっぱりあい、告げ口、喧嘩は、日常茶飯であった。これに耐え、いなす術（すべ）をさとは心得た。

言葉に表わすと、「人悪しきは我悪しき」である。相手がいじわるをするのは、自分がいじわるだからである。世の中はすべて鏡なのだ。そう思えば腹が立たないし、どころか自分を厳しく律せねばならない。これが、さとの生涯の思想だった。この思想は夫の聖謨も同様だった。だから二人は添い遂げた。

江戸から奈良へ来る際、箱根の関所を通る。日本一、厳重な関で、江戸から出る女は、いわゆる入り鉄砲に出女で、ことの他詮議がやかましい。特に武家の奥方には厳しい。改め女（老女）が髪を解かせて、髪の付け根まで調べる。

これは川路が日記（寧府紀事）に記している事実だが、さとの場合は駕籠の戸を開いて微笑したとたん、改め女があとしざって地面に平伏したという。そのまま通行を許した。さとの威厳に打たれたらしい。

幕府が崩壊し、官軍が江戸城を総攻撃するとされた当日、川路聖謨はさとに用を言いつけ、さとが退出した隙に腹を切りピストル自殺した。徳川将軍家への殉死である。さとが葬儀を執行した。

翌々日、孫嫁の実家に挨拶に伺った。道々、桜が満開である。思い起こすと、この日は奈良入りした日に当たっていた。

「この春は花見てもまず散るものは亡き人忍ぶ涙なりけり」

さとは明治十七年八十二歳で世を去った。

【編集部より】『陽気』令和2年12月号で連載終了した、川路聖謨が主人公の「まほらま」。前半をまとめた『桜奉行』につづき、後編の『花のなごり　奈良奉行・川路聖謨』は、11月26日に発刊しました。ぜひ、ご覧ください。